

カトリック大阪高松教会管区部落差別人権活動センターたより

特別号
25年8月
No.73

カトリック大阪高松教会管区部落差別人権活動センター事務局

京都教区カトリック正義と平和協議会

〒604-8006 京都市中京区河原町三条上ル 河原町カトリック会館

発行人／奥村 豊

TEL 075-223-3340 FAX 075-223-3371

E-mail: bukatu@kyoto.catholic.jp ・ seiheikyoku@kyoto.catholic.jp

Home Page <http://www.kyoto.catholic.jp/bukatu/>

芝居 (DVD) 上映と対談講演会

「満州分村移民と部落差別」熊本「来民開拓団」の悲劇 —侵略に利用された差別、重なる加害と被害—

日時：2025年2月11日(火) 14:00～17:00

場所：河原町カトリック会館 地下2階 大ホール

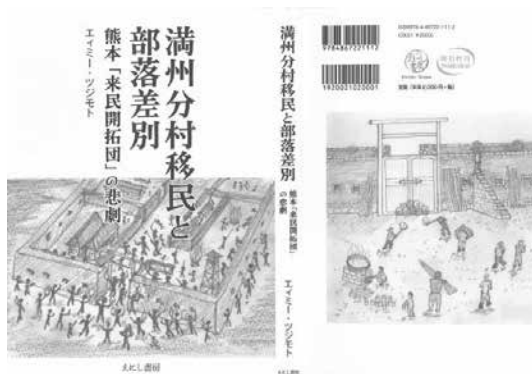
講師：松浦 悟郎さん(名古屋教区司教)

講師：エイミ・ツジモトさん(国際ジャーナリスト)

司会奥村神父：皆様、今日は休日にもかかわらず京都までお越しいただきましてありがとうございます。京都教区カトリック正義と平和協議会、カトリック大阪高松教会管区部落差別人権活動センター共催によります講演会を開催させていただきます。

「満州分村移民と部落差別・熊本来民開拓団の悲劇」というテーマでお話をいただきます。

国際ジャーナリストのエイミ・ツジモトさんとカトリック名古屋教区の松浦悟郎司教です。お二人の掛け合いで進めてまいります。プログラムは、最初『満州分村移民と部落差別』というエイミさんのご著書があるのでそのあたりを少しお話しいただいて、それに基づくDVDを皆さんで鑑賞していただき、その後お二人のお話を伺い、皆様からの質問という形で進めていきたいと思ひます。思ひのほかたくさんお越しただいて、どのように進めるかも、いろいろ考えなくてはならないと思ひますが、まずは始めていきたいと思ひます。申し遅れましたが、私は京都の正義と平和協議会の担当と大阪・高松教会管区の部落差別人権活動センターのセンター長も兼ねております奥村です。よろしくお願ひいたします。それでは京都教区の司教でこの大阪の部活センターの担当司教であります大塚司教より、まずはご挨拶をいただきます。





大塚司教：皆さんこんにちは。京都教区の大塚司教です。今日は司会の奥村神父様が案内してくださったテーマでの対談となっております。今年は戦後 80 年、いろいろな面で、大きな節目をむかえる年であります。終戦から 80 年になったのは、それに至るまでに明治からの日本の国の在り方が問われているのではないかということをお忘れてはならないと思います。その意味で今日の満州の開拓団もまさに戦前に始まり、

終戦にいたった中での悲劇であると知り、私は全然知らなかったことで今日は、皆さんがたと一緒に勉強したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

司会：それでは、エイミさんよろしくお願いいたします。

エイミさん：エイミ・ツジモトでございます。本日このように、長年に亘ってお互いに話し合いを続けてまいりました松浦司教様とのこういった場を設けていただきました大塚司教様、そして正平協の皆様方に改めてお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。そしてこのところずっとわたくしをフォローしてくださっている奥村神父様、とてもありがたく思っております。これからDVDをご覧いただきますが、それは今から 80 年前、敗戦を知らないまま「全員自決」を強いられたある開拓団のお話です。

熊本県山鹿市の端っこに、来民（くたみ）という村がありました。その村は今でいうところの被差別地区だったのです。日本政府はその地区に、新天地満州に行けば部落差別がなくなるといって説得をつづけ、ついに村人たちは決心をしました。満州では非常に苦しい状況の中での開拓生活を送ることになるんですが、驚くことに 8 月 15 日の敗戦を知らされないまま、日本政府、関東軍によって厳しい状況に追いやられていった満州の人たちが「まだ来民開拓団は誰も逃げていない。彼らを襲撃しよう」という事になって、8 月の 16、17 日に、開拓団の周りを一重二重三重、数え切れない満州の人たちが彼らを襲ったのです。そして最後の最後、力尽きるまで戦うのですが女性や子どもたちは一つの場所で自決をしてしまいます。一人残らず全員が自決しましたが、実はその半数以上が子どもたちだったんです。3 歳、4 歳、5 歳です。ただその中でたった一人だけはこの悲劇を「自分たちはこうまでして差別を受けるのか、この実態を是非にも母国に故郷に届けてもらいたい」と団長の命令で、50 歳前の宮本貞喜という人ですが、命からがら逃げて、ようやく翌年日本に帰ってくるようになりました。そして彼の証言によって、この大変な悲劇が世に出ることになるのですが、その村の悲劇は拡散されないまま今日まで来ていました。各地の開拓団では皆さんは本当に悲惨な目に遭われて、集団自決、あるいは逃避行の中で命を落とされていった方も多くいらっしゃいます。ただ、この来民開拓団というのは、全員自決をしなけりゃならなかった。まず母親は子どもたちを殺め、そして子どもたちが一人もいなくなり、命絶えたところで、最後に大人たちがお互いに喉元を突き刺しながら亡くなっていきました。ですからわたくしはその歴史的な事実に対して、これは「強制自決」だというふうに伝えております。集団自決ではなくて、国に暗黙のうちに強いられた自決とわたくしは位置づけております。そして宮本貞喜の声をもとに、遺族のお孫さんや子どもたちが忘れてはいけないこの記憶をずっと紡いでいけるように、今のうちに宮本貞喜の声が届くうちに紙芝居にしよう



ということになり、地元の小中学生が作ってくれた一組の紙芝居がございます。それは今も現存するんです。その紙芝居を、我々関係者はDVDに収めて全国を巡回しております。このような悲劇は本当に二度とあってはならない。特に今年は戦後80年ですから、ただ単に昔の出来事であった、過ぎた日のことであったととらえるのではなく、今このような来民の悲劇が皆さんご存知のように現実ガザで起きているんです。80年後の今ですね。そういうことも重ね合わせながらこの紙芝居、拙いものだとは思っておりますが、ぜひ見ていただきたいと思います。そして紙芝居のいくつかのシーンは実は白黒に最近、改編いたしました。それはなぜかと言いますと、熊本県をはじめとしてわたくしたちが巡回する小学校や幼稚園でも見せる機会があるのです。そうしますと、あまりにも血生臭いところで子どもたちは眠れない、これだけはなんとかありませんかということになりました。それであえて、子どもたちにとって惨いと思われるシーンだけは白黒に改編いたしました。あとはすべてそのままになっており、約30分です。ご覧ください。その後、わたくしと松浦司教様で神父様は先ほど掛け合いとおっしゃいましたが、掛け合いと言われますと漫才みたいになるんですが、そうではなく真剣な在り方で、ぜひ大塚司教様にも改めてこの悲劇を学んでいただき参加していただくなかでお話ししてまいりたいと思います。ありがとうございます。

DVD 上映

熊本県山鹿市来民では、毎年8月17日開拓慰霊祭が行われています。村の子ども会を中心に、わっしょい、わっしょいと小中高生と一緒におみこしを担いで開拓慰霊祭の心を受け継いでいます。私たちはこれを戦いの祭りと言っています。1945年昭和20年8月17日、日本が戦争に敗れて2日後のことです。来民開拓団に残っていた276名の人々が満州の地で集団自決をしました。いや一人、開拓団全滅の悲劇を故郷に伝える役目を担った、ただ一人を残しての全員自決と言っているものでした。



その一番の犠牲者が幼い子どもたちでした。亡くなった276名の半数近くが15歳以下の子どもたちで、一番多かったのが3歳や4歳の子どもたちだったのです。実は紙芝居を作った時、亡くなった人は275名とありましたが、その後一組の若い夫婦に赤ちゃんがいて、その子も犠牲になっていたことがわかりました。なんと惨いことでしょう。ではなぜこの様に尊い命が奪われることになったのか、その真相を明らかにし、二度とこのような悲劇を生み出さないように、戦争のない日本であり続けてほしいとの願いがこの紙芝居には込められています。戦争の悲惨さを正面から見つめない限り、遠くない将来、再び戦争が起こされるかもしれないからです。だからこそ276名の人々が集団自決に追い込まれた真の背景を見つめ続けなければならないのです。来民開拓団は被差別部落の人々に編成された、日本の歴史上稀に見る開拓団でした。ゆえに、日本に今なお残る被差別部落の真相を人々にも見つめ直してほしいのです。そして、全国の親や子どもたちとともに学んでほしいと願ってこの紙芝居を作りました。皆さんや、未来の世代の人々に捧げるために、276名の尊い命は静かにそのことを、今を生きる私たちに語り伝えてくれています。「人の世に熱あれ、人間に光あれ、すべての人たちに」。お待ちせしました。それでは紙芝居「275人の遺書記達人」の始まりです。



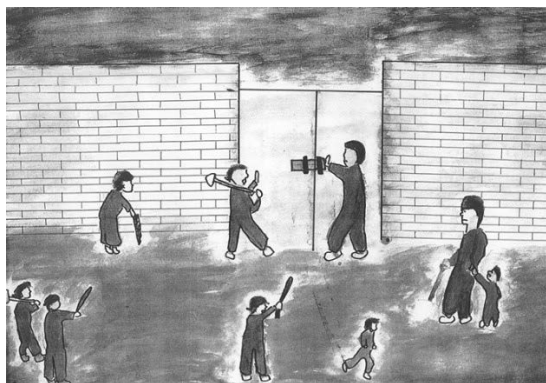
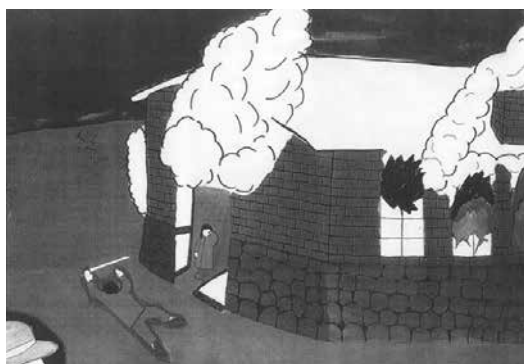
ここは満州、来民開拓団の村、静かで平和な村だった。真っ赤な夕日が沈むまで、みんなは広い農地で一生懸命に働いていた。だが 1945 年 5 月に軍の現地召集が始まり、男たちは兵隊に取られていく。来民開拓団では 82 名の男子のうち、35 名が召集されていった。みんな村の働き手であった。残った者たちは、老人から遊び盛りの子どもたちまで、朝早くから駆り出され、コーリヤン、粟、大豆を作るための作業や、牛や豚、鳥などの世話に必死で取り組んだのだ

った。1945 年 8 月 13 日の午後、開拓団本部へ隣町の五家站から日本人警官佐藤さんが駆け込んできた。そして大声で伝言を読み上げた。「来民開拓団はすぐに全員が集合し、陶頼昭の黒川開拓団に避難せよ」。そこには鉄道の駅があったので、驚いた幹部たちを前に、「我が関東軍は極めて不利な戦況にある」。そう言うなり警官は直ちに帰って行った。呆然とする幹部たち。だが急ぎ部落長会議が開かれた。「何としてもこの地を守るべきだ」。「関東軍が敗れたら、我々だけで守れるのか。270 名以上の人間を一堂に集めるには無理がある」。「避難しても、食料はどうす



るのだ」。多くの意見が出た。だが最後には、豊田一次団長の命^{いのち}第一という決定に全員が従うことになった。「全てを打ち捨て、荷物一つで明日 14 日午後 8 時までに開拓団本部に集合する」。各部落長は自分たちの部落へ急ぎ、取って帰っていった。部落長たちは戸惑う団員たちを大声で叱咤激励しながら、引き揚げ準備に取り掛からせていく。この年の夏は満州に来て以来の豊作で、みんなこの地を離れづらかったのだ。おまけに老人や子どもたちだけでは出発作業にも無理があった。定刻の 8 時がやってきた。だが本部から最も遠い二つの部落からは誰もやってこなかった。不吉な予感、不安が募った。そこへ突然、遠くから夜空に響く馬の蹄の音が近づいてきた。みんなが外に飛び出ると、深手を負った 15 歳の川村青年が馬から降り必死の形相で告げた。「二つの部落が中国人に襲われ、二人の女性が殺された。みんな戦っている」。直ちに年若い青年たちが救援に向かった。だが、ようやく本部にたどり着いた二つの部落の団員たちは満身創痍。目を覆うばかりの悲惨な姿で、それを見たみんなは震えおののいた。本部に全員集合して、一夜が明けた 8 月 15 日の朝。突然、五家站から中国人警察官がやってきてこう言った。「引き揚げ用に馬車を 30 台用意するから取りに來い」。救いの手が差しのべられたと大喜びで代表の 3 名が出かけていった。だがそれは罠だった。副団長以下 3 名は直ちに拘束、人質にされたのである。そうとは知らず、馬車を待つ開拓団本部に中国人役人がやってきて言った。「出発を中止し待機すべし」。その命令に、幹部たちは混乱する。ところが、昼過ぎには再び、中国人警官たちがやってきたのだ。開拓団にある武器、弾薬を渡せば、先の 3 人を返すだけでなく、君たち開拓団を守ってやろう。この時初めて、団長たちは全てが罠だったことに気づいた。だが既に遅かった。命第一

を主張する団長は、ついに全てを渡し、3人の救出に向かう決断をした。時は8月15日、戦争が終わったことを開拓団では誰も知らなかったのである。最悪の事態を予想した団長は、みんなで水杯の儀式を行った。もう二度と会えないかもしれない別れを覚悟したのである。その時である、親しかった中国人の一人が飛び込んできた。「警察からこの開拓団を襲えという命令が出ています。くれぐれも用心してください」。彼は涙を流しながら、それだけ言うと帰っていった。「もはやみんなで力の限り応戦して、現地人の侵入を防ぐしかない。そして最後は全員自決」。とりあえず、団長の言葉に誰一人迷うことなく直ちに戦いの準備を始めていった。幼気な子どもたちはレンガを集め、竹やりを作り石灰を新聞紙で包み目つぶしの玉にした。そして門を守るため、大きな石も転がし運んだ。女たちは薪を集め大鍋に湯を沸かし、炊き出しやおにぎり作り。彼らの姿は戦いの前夜さながらであった。立てこもりを決めた開拓団本部は土を突き固めて築かれた高さ約3メートル、厚さ1メートルの土塀に囲まれていた。土塀には、敵を迎え撃つための銃眼も開けられていたが、肝心の銃は全て渡してしまっていた。夜10時を過ぎた頃、暗闇の中で突然襲撃が始まった。女、老人、子ども、それぞれが二つのグループに分かれ、そして表門と裏門を守っていく。15日の夜は、傷つきながらもなんとか持ちこたえた。日付が変わった頃団長が幹部たちを集めた。「こうなったら日本人らしい死に方をするのだ」。老人、子どもは本部にある加工場で、団長、副団長、付き添いのもと自決する。また、団長、副団長は全員の自決を見届けた後、加工場に火をつけ自らも自決するのだと。最後に団長の豊田は宮本貞喜を呼んだ。「お前だけは生き残ってほしい。そしてこの惨劇を故郷に知らせてほしいのだ。どうかこの願いを聞き入れてくれ」。「皆が死ぬのに、自分だけおめおめと生きて帰れるか」。彼には11人の子どもと孫、そして長年連れ添った妻がいた。だが生きて帰るには陶頼昭まで行くしかない。そしてその道を詳しく知っているのはこの自分だけだ。貞喜は団長の思いを受けるしかなかった。8月16日の大攻防戦が終わった。いつの間にか敵には義賊たちも加わっていた。開拓団の少年たちは裏と表の門を守ろうと叫びながら抵抗した。空腹、疲労、眠気に苦しみながら、明けて17日敵は2000人近くに膨れ上がっていた。開拓団本部の周りは七重八重に囲まれ少しの隙間さえなかった。午後7時いつの間にか門の下が掘られており、そこからどっと敵が侵入してきた。もはや手立てはなかった、ついに表門は破られたのだ。どこからか「バンザイ！」と叫ぶ団長の声が響いてきた。表門裏門の前で最後まで戦っていた20名近くの青年隊が団の中に入ろうとした



途端、加工場でバーッと火の手が上がった。「もはやこれまで」。青年たちは引き込まれながらも火の中に飛び込んでいく。炎は来民開拓団員275名の命を瞬く間に包んでいったのである。それは1945年8月17日のことであった。自決は毒薬を飲むか、刃物で喉元をつくかのいずれかだった。一人、生き残らねばならない貞喜。今頃は妻が9歳の娘ひろ子の柔らかい喉に短刀をさしている頃か、あるいは5歳のかつみの胸から真っ赤な血しぶきが噴き出している

頃か。妻のこれまで見ることのなかった血みどろの恐ろしい形相などを思い浮かべ、心が張り裂けそうになる。襲いかかってくる大鎌を必死で避けながら頭をよぎる家族の惨状に、ただただ苦しみもがくほかない貞喜であった。容赦なく襲いかかる敵の攻撃を必死でかわしながら、貞喜はふと自決場所の加工場を振り返った。するとあろうことか五女のすみ子が父貞喜の姿を見つけ、ふらつく足取りで近づいてくるではないか。追いかけてきた妻が入口まで現れたかと思うと、すぐにすみ子呼びつけた。「こっちへおいで、早く」。すみ子はきょとんとした顔つきで妻の胸へと戻った。貞喜の胸は張り裂けんばかりだった。開拓団の最後を報告する任務を背負った貞喜は崩れたレンガの中や雑草に身を潜め騒ぎが収まるのを待った。どのくらい手を合わせ拝んでいたのだろう。つい先ほどまで阿修羅のごとく戦っていた我が仲間たち。その戦いが嘘のように辺りは静まっていた。いつの間にか降り出した雨が貞喜の肩や涙でくしゃくしゃの頬を濡らした。275名の魂よ、安らかに眠れ、と目を閉じ、静かに別れを告げた。

残り火に後ろ髪引かれながらも、貞喜はその場を脱出していくのだった。1945年8月19日の夜のことである。貞喜は何度も倒れながらやつのことで陶頼昭の駅にたどり着いた。そこには鉄道を警備する日本人警官が二人残っていた。貞喜は思わず駆け寄り、必死に開拓団の最後を伝えた。そして「もし来民開拓団から召集された男たちがこの駅にたどり着いたら、自分がここにいることを伝えてほしい」と頼んだ。全身血だらけの貞喜は手当を受けるべく軍医のもとへ連れていかれた。丁重な手当によって九死に一生を得た貞喜。近くの柴田旅館に移され、まるで死者のように50時間以上も眠りから覚めることがなかったという。柴田旅館でしばしの休養をとってのち、貞喜は岐阜県から入植した黒川開拓団に身を寄せた。それは、陶頼昭駅のそばにあった。貞喜はそれから翌1946年5月まで、兵隊から戻ってきた13人の団員たちとともにここで過ごすことになった。戦場から戻った彼らは家族の最後を知らされ抱き合って泣いた。1946年9月貞喜たちはついに故郷来民の駅に降り立った。到着して数日後貞喜は開拓団の最後を報告した。村のみんなが激しく泣いた。中でも孫たちを開拓団に送り出した一人の祖母はあまりの惨さに衝撃を受け亡くなった。なぜ、どうしてこのようなことになってしまったのだろう。来民開拓団の全員がなぜ家族同士で刺し違え死ななければならなかったのか。それは、戦争がそうさせてしまったのだ。もう二度とこのような悲劇を繰り返してはならない。日本は二度と戦争を起こすような過ちを犯してはならない。団長の命令をやっと果たした宮本貞喜は心からそう願う。狭い日本の土地から貧しい農民たちを満州へ行かせるという計画は醜くずるい政策であった。満州開拓という名のもとに、罪のない中国人の土地を奪って手にした土地。土地を奪われた中国の人も、新天地で開拓する夢を持って出かけた農民たちも、日本の国策による犠牲者だったのだ。だからこそ二度と戦争を引き起こしてはならない。そう思い平和な国が続くことを願う貞喜だった。

音楽が入る。

まもなく戦後78年を迎えようとしています。もう二度と戦争をしてはいけない。276名の



尊い命はそのことを今もなお強く私たちに教えてくれています。そして、差別と戦争のない平和な社会を築いていくこと、これが宮本貞喜さんの心からの願いでした。貞喜さんは生前こう語っておられました。「あっちへ行ったら妻や子にそして開拓団の仲間たちに故郷の思い出を存分に話してやるのだ、私が見た戦後のあらゆることを存分に話してやるつもりだ」と。その貞喜さんも1982年あっちへ旅立たれました。きっとそこでは開拓団の仲間たちに毎年8月

17日に開拓慰霊祭を子どもたちが中心となって取り行っていることも報告されていることでしょう。貞喜さんは1946年9月によりやく日本に戻れるようになる日まで岐阜県から来た黒川開拓団に身を潜めていました。苦しくて耐えがたくなる日々に口ずさんでおられたのが「花摘む野辺に 日は落ちて みんなで肩を組ながら 唄をうたった 帰りみち幼馴染のあの友この友 ああああ 誰か故郷を想わざる」そう「誰か故郷を想わざる」でした。亡くなる1年前に念願かなって黒川開拓団の人たちと再会した席上でも、大きな声ではっきりと歌われたそうです。この大切な故郷^{ふるさと}、貞喜さんが命をかけて故郷^{こきょう}へ伝えてくれた開拓団員たちの心を皆さんがこれからもしっかり受け継いでいってくれることこれが私たち大人の願いです。

DVD The End

奥村神父：紙芝居、非常に衝撃的な内容ですね。初めに私からエイミさんにお尋ねするところから始めたいのですが、最後に、DVDの中で語られていましたそもそも来民村の方々が、集団で満州に行かなければならなかったいきさつを少しお話いただくと、経緯がわかりやすいかなと、どうですか。

エイミさん：はい、まずはなぜ来民村の人たちがスポットライトを浴びたかといいますと、戦前政府の政策で全国にある被差別地域の中から開拓団を、明確な数字ではないんですけども20箇所以上を満州の開拓団に送り込むという政策がございました。それはなぜかといいますと明治以後、部落の解放令が出ました。それ以後、差別のある社会を作ってはならないという表向きの理由があったのです。満州へ開拓団として彼らが行くことによって差別がなくなる、言えなくなるという政府の方針を政策の一つに取り入れようとしたんです、この政策を「融和政策」と言います。その中で最初にスポットライトを浴びたのが来民地区の人たちだったんです。じゃあ、なぜ来民がスポットライトを浴びることになったかと言いますと、そこには二つの大きな理由があるんです。皆さん紙芝居の最後に怪訝に思われたと思いますが、細川元総理が来民を訪れています。彼は本来、熊本の細川藩のお殿様の子孫です。もともと熊本の細川藩というのは、貧しい人に対して非常に心を寄せる、そういう姿勢があったんです。そうした状況の下で明治以後、来民の人たちにも貧しいけれども、教育を推進するようになります。来民の地域には6つの村がございました。その中来民小学校というのがあったんです。来民地区の人たちは学びなさい、学べば人生が開けますよ、ということを言われ続けてきました。ですから戦前から昭和に入ってから来民の人たちは非常に教育水準が高いんです。当然ながら教育水準が高いということは、見識も知力も備わってまいります。そういった中で、模範の一つとして最初に送り込むなら来民がいいということになりました。

先に申し上げましたが、なぜ教育を重んじるかというのは、（これは伝聞なのですが）細川藩が援助をしていたという。なかなか資料には出てはこないんですけども、今に至ってもその伝聞は受け継がれていて、わたくしどもの方にも随分昔からそのような伝聞は繰り返して揺らぐことのない事実が来ているということです。

また来民の村の産業としましては、団扇（うちわ）産業があるんです。この団扇っていうのは夏の団扇ですね。その団扇はまず竹から、そして竹をずっと機械（かつては手作業）で広げてさらには紙を貼ります。紙を貼るには和紙を作らなければいけない。そして和紙の上には絵を描きます。そのような団扇産業のプロセスに対しても非常に援助を惜しまずにきておりました。生活は決して豊かではなかった。ただ最小限度の安定というのがあったんです。そこで確かに学校に行けば部落の子だよというふうに関係はさされることはあるけれども、やはり教育を重んずるという観点から、校長をはじめ先生たちも彼らをサポートして励まし

ていた側面が資料ではおおいにみられます。そんな中で満州に最初の開拓団として送るに非常にふさわしい部落地区であるというふうに政府が視点を定めたんです。当初、来民の人たちは行きたくなかった、とんでもないことだと。たとえ差別を受けても気強く生きていくんだ、子どもたちも守っていきますとってずっと政府との軋轢にあつて我慢を続けてきておりました。ところが行くことになったいくつかの要因があるんです。その一つをご紹介します。

来民の村には小さな神社の祠があるんですね。それは部落の中にしかない祠なんです。村の向こうには道路を隔てて真正面に地域で非常に大きな神社があつて、御宇田（みうた）神社といいます。

来民の人たちはお盆もお正月もお祭りがあつても、何があつてもその神社には入れてもらえなかった。そんな悲しい時代が続きました。ところが、熊本から来たある役人が「開拓団に行ってくれるならば、御宇田神社の中に入れてあげよう。そして御宇田神社から、壮行会で送ってあげよう」というふうに口説いたんです。

そうしましたら、子どもたちは自分の同級生は夏祭りになると御宇田神社に行く、でも自分たちは行けない。親たちにとってこれはとてもつらいことでした。ならばと、いや断腸の思いで政府の政策に最後は屈することになった。これは一つの事象にすぎない。ほかにもたくさんあります。自分たちが開拓団に行った後は、子どもたちが自由に御宇田神社に出たり入ったり、お祭りの時もお詣りの時もお参り出来るということを強く約束をもらった。その上で、繰り返しますが断腸の思いで彼らは来民の村を去っていったというのが事実です。やむなく政府の融和政策にのっかり渡満へと追い詰められていったと言っても過言ではない。背後にはそういった部落差別の厳しい糾弾が周辺からも連綿と続いていたという大きな理由が横たわるのです。

奥村神父：詳しくお話しいただいてありがとうございます。政府の政策、差別解消のための融和政策といったものに当初は乗っていくことがなかなか出来なかった。よく被差別部落が話題になったときに、教会でもこの前話題になってある方がおっしゃったんです、「そんなに差別されるんだったらどこかに行けばいいじゃない」ということを。他のところに行ったらわからなくなるからって言って、それちょっとおかしいです、そこに住む権利が当然ある訳でどこに住むかを人に指図される筋合いじゃないと。そんな話が教会でもありました。ですから、どこどこに行けば今までの差別はなかったことになるというような理屈というのは非常に問題であるというのはおわかりいただけると思うんです。しかしながら、今、エイミさんからもお話があったような、何かをきっかけにして、やはり差別の現実から逃れたい、もしかしたらパラダイスとは言わないけれども、新しい人生が待っているんじゃないかと思うのは、人間の一つの心理かなと思ってお話を伺いました。教会の一つの活動としてこういう企画もあるのですが、これをしている目的というものに宗教的なことを言わせてもらいますと、人間の解放、罪の束縛からの解放ということがあると思うんです。その中でこういった過去の歴史を見つ、そこに表れている解放されていない現実から、解放されていこうとする働きに、どうやって教会や宗教団体みたいなものが関与していけばいいのか。そういう問いかけに対する一つのアクションとして、今日のような企画もあるのかなと思っています。そこで、エイミさんの非常に素晴らしいお仕事というのは、歴史の検証、これまであまりスポットライトが当てられていなかったけれども、人間の存在に対する眼差しといったものが、今まであまり浮き上がってこなかった現実といったものをよみがえらせて、それを多くの人たちと共有することによって、人間性を取り戻していく。社会を少しでも平和にしていって、そして今日のDVDもありましたけれども、戦争が二度と起こらないようにという私たちの思いを高めていく、そんな特徴を、エイミさんのお仕事の中に感じたりするんです。そこで松浦司教さんに、教会もそうですし社会全体もそうですけど、歴史を振り返って、それをどのように見つめていけばいいのか、私たち人間にとって歴史をどのような角度で見るべきなの

か。平和や差別からの解放、そういった目的をどうすれば少しでもクリア出来るのか、お話をお伺いしたいんですが。

松浦司教：今回、エイミさんの書かれたこの本を読ませていただいて、私も知らない事実でした。そしてその出来事から、先ほど言われた強制自決というのに至った背後には非常にたくさんの複雑な問題が絡み合っ、一つだけじゃないというものがいっぱいあるなということを感じさせられました。そして戦後 80 年を機に、今こそ歴史をちゃんと見ていこうという動きの中で、こういう丁寧な聞き取りというのは本当に大事なことだと思っています。特に 80 年経ったということは、生きてその証言が出来る人も 90 歳以上という、本当に少なくなっている中で、我々が次の世代に伝えるしかないという現実を前に、言わば歴史のつなぎの場にいる、その意味で今こういう歴史を検証するというのはとても大事なことだと思います。何のために歴史を検証するのかと考えた時に、いくつか理由があると思います。

一つは、歴史を検証することによって闇の中に葬られている人たち、一人ひとりの存在に光を当て、彼らの尊厳を取り戻すためです。この来民のことでもそうですが、もし、証言者が一人も残っていなければ、多くの事実とその中に生きていた人たちが闇から闇へと葬られていくことになります。その人たちを決して忘れないということは、残された我々の使命だと思うんです。今回、奇跡的に来民開拓団の一人の方が生き残ってくれたことで、また、エイミさんの聞き取りによって、こういう事実が明らかにされた訳です。しかし、かつての戦争の中で、中国への侵略、朝鮮半島、アジア諸国における戦争ではどれだけの人が闇に葬られているか分かりません。先日、私はフィリピンのミンダナオに 2 週間ほど行ってきましたが、そこでも明らかにされていない多くの戦争犠牲者がおられ、同じようなことを感じました。つい 2、3 日前でしたか、ニュースで山口県の実地炭鉱長生炭鉱が 1942 年に水没した出来事が報道されていましたが、そこで亡くなった人たちのことを忘れてはいけな、今も発掘して遺骨を収集しながら犠牲者を弔うべきだという運動をしている人が出演されていました。その作業は人から人へと受け継がれているというのです。その海底炭鉱には日本人に交じって 136 名の朝鮮人労働者がいましたが水没した時、彼らは全員助けられることなくそのまま埋められてしまった。衝撃的なのは、朝鮮人家族の娘さんが、「ああ、お父さんがそこにいる」って叫んでるさなかに、憲兵たちがやって来て坑口をふさいでしまったんです。中に生きている人が多くいたのにです。それは 1942 年の出来事でしたが、彼らの遺骨を探して故郷である朝鮮に戻そうとずっと取り組んでいた日本人の方がいましたが、その方が亡くなった後、その運動を次の女性の方が受け継いでいたということでした。国はそれをやらないので、市民がお金を集めて運動を続けているといった内容の報道でした。最近、ようやく坑口が見つかり、潜水ボランティアも協力を名乗り出て探してくれたけど、「遺骨」はまだ見つかっていない。作業の際には韓国からも遺族の方が見えて、みんな泣きながら、「アボジがここにいる、まだいる、ふるさとに連れて帰りたい」って言うていました。4 月ぐらいに暖かくなったらもう一回やる予定とのこと。まさにこうした活動を通して、海底で眠っている一人ひとりを探し出し、彼らの尊厳を取り戻していく作業も歴史を検証する一つの意義だと思います。

歴史を検証するもう一つの意味は正義の実現です。してしまったことについて事実を検証し、過ちがあればその過ちに対して謝罪し、償いをすることは残された遺族、そしてお互い国家の間での和解の前提になるんです。正義の実現がなく、そのまま隠蔽したら和解は出来ないんです。つまり歴史の検証は和解に向かっている、それが目的だと私は思っています。被害側も加害側も和解を目指さないなら、歴史の検証が単なる加害者への断罪に終わってしまうからです。

検証するもう一つの理由は同じ過ちを二度と繰り返さないためです。事実を隠すつまり「隠蔽」することは、同じことを繰り返す可能性があるからです。しっかりその歴史を見るということは二度と同じ過ちを繰り返さないためなんです。ヒロシマの平和公園にある碑に

は「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」という言葉が刻まれています。十数年前でしたか、誰かがその碑にペンキを塗った事件がありました。そこには過ちを葬り去ろうという意図があるのです。その意図は決して平和に向かうものではないし、同じ過ちを繰返す動きにつながっていくことは明らかです。こうした動きを和解と平和に向かわせるためにどうしても歴史の検証が大事ななということを思っています。

奥村神父：ありがとうございます。今日のこの来民村の著書と、その他の本をいくつかお持ちいただいていますので、そちらのほうをお読みになるとさらに詳しく理解出来るかなと思うんです。ここで一旦前半を終わって、少し休憩をとりたいと思います。

：再開にあたりまして、松浦司教さんの方からお話をお願いします。

松浦司教：具体的に来民の開拓団が満州に送られていった、そのことについてこの本の中にいくつかの理由が書かれています。私はそれを読んで強く感じたのは、表向きはあなたたち貧しいけど新天地に行けば豊かになりますよ、また、そこへ行けば徴兵はありません、というようにいいことを並べて送られたけれど実態はまったく違ったということです。国ははじめから国策として別の目的を考えていた訳です。つまり、満州に送るということは、関東軍がそこにいるので、彼らの食料を調達するため、あるいは危なくなってきたら開拓団から徴兵をして戦わせるという目的が背後にあったということです。もう一つこれを見てえっと思ったのは、彼らに青酸カリを持たせている。これはいざとなったら自決せよということを意味しています。捕まって捕虜になるよりは、という例の戦陣訓、戦時中に徹底して洗脳されたそのことを、国は実際に想定していた上で開拓団を送っているんだということです。戦争の裏には国策という国民には全然わからない策略が横たわっているということを思い知らされました。このようなことを感じましたが、他に少しなにかありますか。

エイミさん：いい質問をいただきました。先ほど、いろんな状況の中の一つは、差別がなくなるということでした。あともう一つ彼らは絶対に兵隊には行かせません。これ絶対に、というのがあったんです。ところがもう昭和20（1945）年の初めには関東軍ボロボロなんです。ろくな指導者がいなかったし、兵士もいなかった。じゃあどうしたかということ、現地で調達をせざるを得ない状況に陥っていたのです。もう一つ関東軍の背景からいいますと、もはや満州はアウトだけれどもなんとか最後はアジアの方に持っていきたいと兵士が足りないということで、関東軍の上層部たちは19年の終わりにくらいからどんどん南方の方に移動してしまっただけで、満州、今日も開拓団から逃避して無事に帰ってこられた黒田さんというおじいちゃんが来てくださっていますが、もうあの段階では関東軍はほとんどいなかったんです。つまり開拓団から有無を言わず徴兵どころか、強制的に引っ張ってきていました。ですからよく開拓団を見捨てたとか、悪いのは関東軍なんだ、日本政府ではない、天皇陛下ではないと言いますが、その関東軍が見捨てたという背景には、南方にほとんどみんな送られてしまいましたから、民兵に近い関東軍の兵士しかいなかった訳です。ですから彼らは何の訓練も受けていないと言っても過言ではなく、開拓団を守る術もまた守れるはずもない事情がありました。

なかなかその事情を皆さんご存知ないようです。それと徴兵は絶対させないと言いながら、なぜ最終的にそれをさせてしまったかということですね。これが非常に重いところです。そして彼らが全員強制自決、他の開拓団でも自決が相次いだというのは当たり前ですよ。関東軍の人たちは、もうボンコツな兵士しかいないのですから、守れるはずもありません。まして来民に、あれだけの現地人大半の満州人が押し付けてきても彼らは何も出来ないんですよ。そんな中で来民の人たちはどんどん追い詰められていきました。ましてや強制自決の背後には若い男子たちは強制的に兵隊に取られていってしまいましたから、守ってくれる人な

んで誰もいないのです。あの絵に出てきました15歳のあの男の子。せいぜい15歳、16歳の子が慣れない刀などを振り回して必死に抵抗した。皆がとらわれないよう「自決」出来るまでですよ。刀だって関東軍が置いていっているんですよ。皆さん信じられないでしょ。15歳の子が刀を振り回して満州人に突き付けているんです。紙芝居にもありましたがその光景は非常にわたくしはよろしくないと思いました。つまり少年たちをそこまで追いつめたということです。それと青酸カリこれはですね、最初の第一陣の団長、宮本茂と言います。この人は若いのですが第一陣で渡満しました。彼は来民の中でも若き指導的立場にある非常に能力のある人だったんです。自分が団長になって第一陣になることを決意したのです。のちにわかるのですが、実は3ヶ月間彼は山形県で教練を受けているのです。開拓団の中でもリーダーたちは実は「密か」に軍事教育を受けなければいけなかったんです。その教育は何かと言いますと軍事教練なんです。そしてその中で生きて虜囚の恥ずかしめを受けず、これ皆さんご存知ですよ。軍人勅諭や戦陣訓の中にある日本の兵士たちに必ず守れといった大きな一つのスローガンです。戦場では絶対に捕まってはいけない。捕まるということ、生き残るとことは日本人にあらず、ましてや兵士にあらずと日本軍は徹底的にこれを叩き込んだ。団長の宮本茂は最後に「生きて虜囚の恥ずかしめを受けず」それを胸に満州に渡ります。そして開拓団の本部に密かに青酸カリを置きました。ところが現実には集団自決の中では青酸カリを飲んだ人はまずいません。子どもたち苦しいじゃないですか。母親はどうして自分の子どもたちに青酸カリをすくって口に入れられますか？皆さんそんなこと出来ますか、自分の子どもや孫に。来民の人たちはそれが出来なかった。この子たちのためにいやおうなしに、断腸の思いで満州までやってきた。それなのにこの子たちの命を殺めなければいけない。そういう時に、親はどうしたかと言いますと、母親の首、子どもの首、一緒に絞めてまず子どもを殺めました。青酸カリはありましたけれども、まず使っていません。それは、来民の人たちの姿勢のある意味、独特な生き様だったとわたくしは思っております。この来民ははじめから自決するつもりなどなかった。皆さんのお手元にこのような地図が配られています。この地図は来民開拓団の地図です。実は残っているのはこれしかないんです。これは宮本貞喜さんがご自身で描かれた地図を基に作成されています。この地図の周りは全部レンガ造りで覆われていました。戦前ここはロシアの人たち、ロシアのグループの人たちの居住区であり、そこに地元の満州人の地主たちと共同でとても気持ちのいい文化的な生活を営んでいたんです。その建物というのもレンガ造りで非常にある意味では恵まれていたんですね。レンガ造りの中にあったというところで、団長はとても戦争で負けるはずもないし、とにかく自分たちをこういった青酸カリや自決なんて夢々にも思いませんでした。ただ、生きて虜囚の恥ずかしめを受けずという、その思いだけは終生忘れることはなかったんですね。そして最終的に彼（団長宮本茂）は徴兵ではないですが、兵隊に引っ張られていきます。その時に初めてお兄さんである宮本貞喜（生き残った人）に万が一の時は青酸カリのある場所を伝えました。だけどその時にそれを飲めとは言わなかったんです。最後の時にはこれを使いなさいと言わなかった。最後は日本にみんな帰ってもらいたい。つまりたとえ捕まっても帰ってもらいたいという、そういう意思ですね。その時宮本茂さんって30歳になったばかりですよ。本当にしっかりした方だと思います。その後、彼は抑留されてウズベキスタンまで行くんですけども、ウズベキスタンで日本の捕虜になった人たちは、あのエリアの宮殿だとか美術館を造る作業に当たりました。やがて帰って来られるんです。その中で彼は自分の家族も全員が亡くなったということを初めて知り衝撃を受けた。だがその後は一言も何も漏らさずに最後は来民の村の人たちのためにさらなる生活向上を図るということで地元の議員になり、オーバーワークである時に倒れてそのまま帰らぬ人になってしまうのです。青酸カリというのは、色々な開拓団で皆さん飲んだというケースもあります。宮本貞喜は自身の弟との暗黙のうちの話し合いでしたから、貞喜の言うことは大いに信憑性があると思っております。あともう一つです、先ほど司教さんがおっしゃった一人を残したから、こうしてこのような記憶がつながっていきますということなんです。わたくしよく言うんですけども、それに対し

て反論される方もいますが、やはりこれは一つ教育の賜物なんです。おめおめと死んでたまるか。やはりこれだけの思いでやってきた。ならばこの事実、この歴史を未来永劫に継承しなければいけないということで、自決当時の団長（豊田一次：ともに自決）は宮本貞喜にスポットライトを当てました。彼は子どもが7人もいたんです、紙芝居にも出てきました。彼は「嫌だ、一緒に自分も自害して果てる」。彼らは死ぬとは言いませんでした。自害という言葉を使ったんです。自害をして果てると、でもそうになってしまったら、この悲劇、国の命令に一旦は背いたけれども、最後は受け止めて、自分たちも日本人だと、日本人の誇りとして、五族協和が本物であればという思いにおめおめと満州まで来てしまった。でもそれは間違いだった。ここで自分たちも加害者だったという自覚があらためてめばえてきたのですね。あの終戦、敗戦です。8月15日。その夜に、みんな若い人はいなくなりましたが、団長が言ったんです。50過ぎの豊田一次さんという人が、宮本貞喜に「あなたしかいない」。なぜかという、ここ（紙芝居）で陶頼昭という駅が出てきました。中国の東北地方ではメインステーションです。そのすぐそばに黒川開拓団という、岐阜からやってきた大きな開拓団があるんです。そこが来民開拓団から最も近いところでした。それも簡単に行けるところではない。歩いて、歩いてさらには馬車に乗って行かなければいけない、それくらい離れているのだけれども、その道筋を正確に知るのには宮本貞喜しかいなかったんです。だから「お前に行ってもらいたい」という、彼は本当に奇跡的にしかも心身を切り刻まれながらも黒川開拓団までたどり着くんです。ただわたくしはここで確かにあの時に、自決まで追い込んでしまった満州人たちもいますけれども、貞喜一人では陶頼昭までまず行けません。それは多くの満州の人たちが貞喜を助けてくれたんです。傷ついた彼を介護し、食料も与え、何とか行けるところまで満州人の服装に扮装をして、これをお使いなさいと言って、多くの名もない満州人の方は無事に貞喜が陶頼昭まで行ける大きなサポートをしたという事実もありますから、彼一人だけで行けたのではありません。このことを認識するのはとても大切なことです。貞喜さんはその思いを、ご自身の息子さんに伝えた手記もごございますので間違いのないことです。

松浦司教：ありがとうございます。今の話を聞くと、我々は歴史を単純化しようとする傾向があることが分かります。どこの国でも、その国独自の「公的記憶」（例えば、「加害国」と「被害国」と区分けするなど）をつくって教えていくと思います。確かに、多くの部分はその通りだと思いますが、しかし、その一つの出来事の中にいっぱい個別の要素があることにも目を向けるべきだと思います。先ほど、日本人を助けた中国の方がいらっしゃるという話もその一つかもしれません。私は今 87 歳の神父さんと一緒に生活していますが、彼は子供の時、満州に住んでいて、先日、その神父さんから、満州から引き揚げて来たときの話を聞きました。私が大変でしたでしょう、中国人から何か攻撃を受けましたかと聞くと、「いや、何にも無かったよ」。つまりその方の家族は会社で満州に行っていて、開拓団ではなく会社の関係なので、中国の人たちとも別にそんなに悪い関係でもなく、そのまま帰って来たという訳です。黒川の場合は、攻められなかったけれども、そばにソ連の兵がいたからとか、そういう理由がいろいろあったでしょう。ところが、この来民の場合は、千人とか、三千人の中国人が囲んで攻撃し、本当に悲惨な結果になった訳で、やはりなぜそこがそれほど攻められたのかという理由があるはずですよね。この本の中にその理由を感じる写真がありました。そこには開拓団の先遣隊が写っていましたが、真ん中には白い服を着た地元の中国の方がいましたが、あとはみんな先遣隊です。それも、先遣隊はみんな銃を持っているんです。銃を持たされているのかもしれませんが、それは彼らが皇軍であることを象徴しているんです。また、開拓団の方も当然何もないところを開拓していくんだろうと思って行ったら、すでにきれいに整備されていて、土堀まで出来ていてびっくりする訳です。なぜそうしたかという、実はすでに事前に関東軍が地元の人の土地を安く買い叩いて追い出しているのです。この本には「早く出て行け！」みたいに言われ、泣きながら中国の人が土地を出て行った。

つまりそういう準備をして、土塀を築いていて、見張り台を作り、銃眼を作って銃を撃てるようにしていたのです。そういう準備がなされていたということは、地元の人たちは日本軍が来て、自分たちをまさに侵略して狙ってという、その防御がかえって住民の憎しみとか駆り立てたということです。他の開拓団はどうだったのでしょうか。

エイミさん：そうですね、それも申し上げますが、まず来民に関して、わたくし自身がそのあたりの情報を持っているところからお話ししますと、来民の開拓団の人たちは周辺の満州の人たちととても友好的だったんです、これは本当なんです。なぜかと言いますとこの先遣隊が司教様がおっしゃったようにレンガ造りであり土塀造りであり、ここに今地図がありますが、全部囲まれているんです。それ以外の開拓団というのは本当に荒れた土地に、アメリカの開拓者が大平原の真ん中にポーンと放り込まれたように、何にもないところから耕して家を造り、あるいは満州人が住んでいたところに決して豊かではないようなお家に住まわせられながら、一生懸命開拓に励んでいたってところなんです。ところが来民の場合は、行ってみたらロシア風の彼らが自決したところは開拓団の本部です。2枚目の絵図にあるかと思いますが開拓団の本部なんですが、この周りは全部レンガ造りなんです。見るからにロシアンスタイルのビルだったんですね。びっくり仰天するんですよ。あれだけ3ヶ月戦陣訓を叩き込まれる。百姓のテクニックは24時間の勢いでトレーニングさせられる。でも実際にそう思っていたら何もかも整っていて、そればかりか耕す畑もないくらいもうすでに出来上がっているんです。先遣隊はなぜこんなにきれいなんだろうと、みんな最初から怪訝に思うんです。そうこうするうちに周辺の満州人たちが、次第、次第に関東軍によって追い払われていったということを知るのですね。ところが来民の人たちはそれでは良くないというところで、最初に彼らが目覚めたのは、日本にいてずっと自分たちは差別を受けてきた、つまり被害者であった自分たち。それがなんと満州に来たら満州の人を追い出しただと、しかも安いお金で。そしてこの開拓団フェンスの周りですね、ささやかに彼らがかつて耕した、小作の人たちの畑のなごりがあるんです、そういうところに遠慮しながら小作人たちはやってきて、満州人はみんな怖がっていますから、開拓団員にいつ殺されるかわからない覚悟の中で来るんですよ。その姿を見て、来民の人たちはどうぞ入りなさいと言って、最初から友好的な関係を築くようになります。そして（団員）若いですから、中国語を覚えるのも早い。そうこうするうちに事情がどんどんどんわかってくる、自分たちはとんでもない「加害者」じゃないかと、日本にいたときは「被害者」だと思い込んできたけど、満州に来たら途端に逆転して自分は加害者になってしまった、と。その思いを先遣隊員たちは忘れないんです。次にやってきた家族や、また次にやってきた村の人たち、これ第4次まであったのですが、正式に渡ったのは第3次までなんです。ほとんど皆さんは来民の周辺の人たちです。ただ、人づてに開拓団にどうせ入るんだったら来民の方が環境がいいということで、そうじゃない人たちも3次の中では入ってくるようになりました。つい先日のことです。毎週どなたかが、わたくしの家ポストに赤旗日曜版を入れてくださる方がいます。それを見ましたら山田洋二監督が、僕は中国侵略の申し子だったということを記事に書いていらして、実は宮本貞喜も同じことを帰国直後から言います。申し子と、加害者というよりも中国侵略の自分が申し子だったと。わたくしそれを聞いたときに本当にお会いしたかったと思いました。貞喜さんはある時期スポットライトを浴びるんです。なんとか楽な生活をしなさいと、あなたが戻ってくれたことによって来民の歴史はわかりましたと。でも彼はそのような人々の心に感謝しながらも、一度たりともその厚意を受けたことはなかったと聞いています。夏にはアイスキャンディーを売りながら街を歩きました。冬になると竹林の落ち葉拾い、来民の団扇づくりは今も継承されておりますが、そういうようなことをやって最後まで清貧に暮らされた様子です。それは中国侵略の自分はまさに申し子であったからこそかもしれないと思っています。

松浦司教：話を進めていきますと、戦争を体験した人たちは、いろんな意味で語れないという痛みを持っていると思うんです。歴史検証として話を聞き出そう、あるいは真実と向き合おうとするときに、その一人ひとりの言えない事情とか苦しさとかいうのを、後の時代の我々は簡単に踏み込めないところがあるなということを思いました。エィミさんの本の中で、私は大切だと思ったところがありました。それは、その当時行われたことは、想像を絶する状況の中であつたということです。それとはかけ離れた今の私たちが簡単に当時のことを断罪はできない。しかし、同時に真実はちゃんと見るべきだと思うので、その辺のことがとても難しいことだなと思うんです。例えば加害に直接加わった人たちは直接加わったという責任もあるけれども、それを命令した人がいて、さらにその命令は、その背後にはもっと上のレベルの方針があつたり、国策があつたりしてこうなっていく訳です。そうすると、一番直接的に手を下した人は苦しい自責の念を受けていく訳です、おそらく今までその人たちが責任を一番感じていたんじゃないかなと思います。ただ、一体なぜそういうふうに戦争をしていったのかというこの本質に迫っていくと、もっともっと上の人たちの責任がはるかに大きいと思うのです。そういう意味では責任の問題は非常に難しいですね。当時、最前線で直接的に加害をした人に対してだけ責任を押し付けてはいけないし、加害者として一括りにしてもいけないと思います。つまり、その中で抵抗した人たちがいっぱいいるし、私は最近いろんなところでそうした人たちの存在を知ったんです。例えばこの間、高橋源一郎さんのラジオ番組で、彼がこう言っていたんです。作家の古山高麗雄さんは日本兵となって中国戦線へ行ったのですが、派遣されるときに二つの決心をしたんです。それは何かというと「私は銃を持っても絶対人を殺さない」という決意。もう一つ「慰安所に行かない」この二つを心に決めて赴いている訳です。実際に、例えば中国人の女の子が逃げているのを一人の日本兵が撃とうとした時に、彼が「銃をくれと、俺が撃つ」と言って狙う真似をし、わざと外してその子を逃がしたというのです。そして慰安所にも絶対行かなかった。命がけでこの二つを守ってきたけど、日本に帰ってきたら、日本軍は戦地で民間人も虐殺し、従軍慰安所で女性たちを性奴隷にした鬼のような日本兵、と言われ、一括りにされて自分もその中に組み込まれ、愕然としたらしいんです。だから客観的な事実をしっかりと検証しながらも、一括りにしてみてもしまわない、つまり、戦争という大きな流れの中でも抵抗し、抗い、もがいていた人もいたという事実にも目を向けなければいけないって思うんです。そこにも目を向ける時、もしその場に私がいたらどうしたのだろうかとの問いが出てくるし、そのために今からどうしたらいいんだろうか、みたいなことを自分に問い続けることが歴史を振り返る大切なことだと思います。

エィミさん：そのとおりですね。今、司教様の銃を撃たないということで、ここは京都ですから、ちょっと本筋からそれるんですが京都の進々堂のパン屋さん。あそこの戦前の社長は続木さんといいます。彼はやはり中国大陆に徴兵で行かされました。その時に彼ともう一人の丹波の篠山のお坊さんがいるのです、その二人が自分は撃ちたくないとお互いにボソボソと話しているんです。それを聞いた上官が、あるとき中国の捕虜を前に並べ、あいつらを銃剣で突き刺せと言ったのです。だが二人とも、それは出来ないと。お互い人間同士なんだから、そういうことは出来ないと。言って最後まで拒否したんです。ただ、幸か不幸か上官は彼らを殺しませんでした。寒い雪の降る中国の冬、素っ裸で二人をほぼ一晩中外に出しておいたんです。それを見た上官のさらなる上官が、これはいかんということになり「一旦、中に入れろ」と、そこまでは良かった。ところが上官の上官がその場を離れていった途端、命令をした張本人の上官はですね、二人を再び素っ裸にさせて捕虜を突き刺せなかった広場のところに四つん這いにして何周も回らせて「ワンワンワンワンと言え」と命令した。進々堂の前の社長ですよ。皆さんパンを買いに行かれたら彼の勇気を思い出して差し上げてください。本当に彼はそこまでやったのですよ。兵士にはならされたけれども一人たりとも殺めなかったと言ってかろうじて戦後引き揚げて来ることが出来たんです。そういう人もいました。

高橋源ちゃんのお話もありますけれども、これも本当に惨いことだとわたくしは思いますね。そこまでの方針で徹底してやれるというのは、これは単なる上からの押し付けでそうなっているのかといえば、わたくしはそれだけではないと思います。もっともっと戦争がもたらしていく狂気、今こそ、そこに迫って分析していかなければわたくしはいけないと思うんです。そしてそれを言うに言えないでいた（上官に逆らえないでいた）兵士たちも、同じように引き揚げて来た。進々堂の社長の隊は戦後みんなほとんど死なないで引き揚げている訳です。だが彼らは一切口を噤むんですね。わたくしはその（犬マネ）ことがもちろん本当であったと思います。のちに彼は会社の「会報」で書いておられるし、奥様にも何度かお目にかかり確認しております。しかしながらその当時の関係者に聞きましても、誰もそうだったとは言ってくれないんです。わたくしはその時、今司教様の話でも思い出しましたが、アインシュタインご存知ですね、皆さん。ユダヤ系ドイツ人。彼はナチスドイツから追い出されてアメリカに亡命します。その時に彼は言いました。「悪い行いをするものが世界を滅ぼすのではない。それを目にしながら何もしない者たちが滅ぼすのだ」と。わたくしは本当にそう思う。ですから先ほど大塚司教様はわたくしに、「よう頑張っているね、アメリカに帰らなきゃいけないのに」と励ましてくださいましたが、わたくし自身もここまで非常に手厳しい切り口でいろんな場所で講演をしたり、記事を書いたり、本に書いています。実はこれまで何でもなかったことはないんです。これまで書いてきた本の中で一冊たりとも、わたくしを殺すぞ、痛い目に遭わすぞと言わなかった人はいない。殺すぞと言う人はいっぱい今もいるのです。でもわたくしは、その時にいつもアインシュタインの言葉を思い出しては、自分自身に言い聞かせます。命がある限りもう少し事実をつたえ続けていきたいなと思っております。別に高橋のそれが特別ではないとわたくしは思いますので、今後そういう人たちの歴史ももう少し検証していく。まだ 80 年ですから、96 歳でもお元気な方がたくさんいらっしゃいますので、なんとか引き続きこのような聞き取り作業をカトリック教会の方でもお願いしたいと思っています。

松浦司教：ふつう、私たちはやってはいけないこと、やりたくないということがわかった上でどうするかを決めていると思います。しかし、あの時代では、自分の良心からくる判断をしないように洗脳されていく訳です。教育とか国自体が全部、国を守るために戦争することは当然のことという方向に向かうとそうになってしまう。私、あちらこちらで平和の集まりとか集いとか行くと、そこで平和運動を一生懸命やっている高齢の方が、「僕は若い頃はね、軍国少年だった」「私は軍国少女だった」って言うんです。当時はそれが当たり前であり、心からそう思われていたからそのような考え方で一色になってしまった。このような社会の流れの中にあっても、しっかりとものを見続け、これはおかしいことをおかしいと思い続けること自体が難しいし、今後それに抗っていくということはさらに難しいことなんだろうなとつくづく感じました。

エイミさん：そうですね。その通りだと思います。わたくしは実際にこの DVD をご覧いただきまして、司教様も奥村神父様も、そして大塚司教様も、一言ずつの感想をぜひいただきたいと思います。今日は来民の遺族会の方、95 歳で一番年をとっている方がお一人いらっしゃいます。カトリック教会で来民のお話をしますと言ったらいそう喜ばれて、カトリックの神父様たちはどのようにこれを受け止めてくれているのだろうかと。一言ずつで結構ですので、よろしくお願いします。

松浦司教：私はもう言ったから、いいですよ。

奥村神父：紙芝居の方は初めて見ました。本の方は読ませていただいたんですけど、今の社会から考えたら、考えられないことですね。要するに大勢の人たちが集団で国策だから

ということなんだけれども、また自分たちの利益とかメリットも考えながら、そういったところまでいったということ。それ自体がまずそんなことってなかなかあるものかなというふうに、つまりいかに戦争状態になると国がそっちの方向に向かっていくと、逃げて、抗えないものを冷静に考えたりも出来なくなってしまう。そういうものだな、というのが一つあるんですね。しかしその中でおそらくわかっていた人たちもいたはずなんですよ。この政策はおかしいとか、いろんな情報で一番大事なのがお金がどう流れていくとかなんですよね。お金がないと人間は動けないんですよ。つまりお金を出している人がその政策を支持している訳で、そういうことをさせている人たちは、一体誰なのかというのをもしわかっていたら、なんとなかったかもしれないな、というのがあります。そしてあとは情報ですよ。おそらく昔だから、みんな情報を知らない。今のようになんか通信も発達していなかったから、みんな知らなかったんだというかもしれないけど、今つくづく思うのは、これだけインターネットも発達しているにもかかわらず、見えていないことがいかに多いかというのを最近よく考えています。もちろん社会の構造とかシステムが進歩していくことも大事なんですけど、やっぱり人間の感性というか、感じ方、何かおかしいという本能的なそういう感性なんかを育てるというのも大切なのかと。そうすると教育とか、そして一番問題だなと思うのはやっぱりマスメディアの退廃というのか、それを一番今感じています。このままだときっと同じことがまた繰り返されるだろうというふうに思っております。

エイミさん：ありがとうございます。今日は大塚司教さんもお見えになると聞いていませんでしたので、お見えになることがわかっていたら、本当はお席隣にお座りいただいて一緒にお話が出来たのにと、申し訳ございません。

大塚司教：私は初めて今日この事実も知りましたし、今一番心に残っていることは先ほどエイミさんがおっしゃった、来民の方々が差別されていた、今度満州に行ったら周りの人たちの加害者になっていたということを気がつかれた、ということがすごいなと思いました。それはやはり被害を受けた、差別をされた側にいた人たちが敏感だったのかなと言っているかどうかはわかりませんが、そのような気がいたします。そして、私は司祭です。司教ですけども、聖書を読むときに、今、ルカを読んでるんですけども、やっぱり虐げられている人たちに、イエズスが近寄っていった。コントロールしている側ではわからない、貧しい人、虐げられている人たちに近づいて解放を述べていった。彼らは虐げられている訳ですから、虐げられている力から解放されると同時に、人間としても自由というか尊厳があるという意味での解放をルカは特に書いているので、今日のお話で本当に来民の方々の人権とか加害とか差別に対する敏感さがありだったのは本当にそういうことなのかなと思いました。以上です。

エイミさん：ありがとうございました。先ほど大塚司教様はわたくしの顔を見られて「まだ、アメリカに帰らへんのか」みたいに言われましたが、「わたくし帰ったらトランプ政権をはなから誹謗しているので捕まって牢獄に入れられる」と言ったら司教様が「いやいや帰って頑張ってくれないと困るわ」と言われて関西の方ですから面白いですね。実は、わたくしはずっとアメリカのカトリック新聞にこれを書け、あれを書けてやらかしきっているんです。特にガザの問題について、書け、書け、書け、書けて言うんだけど、中途半端にしか書いてくれなかったんですね。ところが実は先週、全米で一番購読者数が多いカトリック新聞があります。ナショナル・カトリック・レジスターというその新聞です。その新聞が、ついに書いてくれたんです。それは何かといいますとトランプ大統領のガザの提案はあまりにも不道徳でふざけていると、誰が見てもそうですよね。そういうふうを書いてくれました。その中で、大統領とも言いたくないんですよ。トランプの計画は、イスラエルとパレスチナの紛争を最終的に解決するかもしれないという、型破りな考えに過ぎないというふうにトラ

ンブ派は今でも思っているんです。でもそうじゃないと、実際には紛争をどんどん拡大させ紛争はさらに拡大する。これはどういうことを意味するかといいますと、ヨーロッパの国々において経済がピンチなのです。ほとんどがウクライナやイスラエルに加担をしたために国民の命が本当に損なわれるぐらい餓死寸前といえバオーバーですが、本当に食料も買えない、ガソリンも買えない、そんな状況の中でヨーロッパ各国の中でも対立が出てくると。そうであってはいけないということを非常に明確に書いてくれて、わたくしはアメリカのカトリック教会も、捨てたもんじゃないと、実は今回初めて思いました。我が家は 5 代前からカトリックなんですけれども、本当にわたくし自身は 50 年以上、カトリック教会とは冷戦状況にあったんです。ところがここ 2、3 年、どういう訳か、この河原町カトリック教会にも、もうすでに 4 回、5 回、この席でお話をさせていただくようになって、雪解けの時って本当に来るもんだな、としみじみ感じながら本日も来ているんですね。そんな中で申し上げたアメリカのカトリック新聞を読みながら日本のカトリック新聞はどうするんだろうと、なぜ何も言ってくれへんのかなと、思っておりました。そしたらですね、先日バチカンの方で、教皇庁の方で出たものがありました。**無限の尊厳一人間の尊厳**についてっていうのを、先月の終わりでしょか、会場の大塚司教様を書いてくださっている文章があるんです。ところどころ、思うところはあるんですが、わたくし自身がアメリカに早速これを英語で書いて返答した箇所があります。きっと書かれた大塚司教さんも忘れてみえるかもしれませんが、ちょっとわたくしの友人に目が悪くて読めないわたくしにかわって、皆さんにもお聞きいただきたいと思います。

教皇フランシスコの回勅、兄弟の皆さんという 2020 年 10 月 3 日に出された回勅を検討した上で、その中で全ての文化的状況と生活のあらゆる瞬間で人間の尊厳を守ること、それを求めている訳ですね。それを受けて大塚司教さんはこのように書かれています。

だからこそ教会は、現代における深刻な、人権侵害を強く非難することを躊躇しません。教会は信仰と人間の尊厳が密接に結びついており、福音宣教と尊厳のある生活の推進が不可分であり霊性とすべての人の尊厳のための取り組みが切り離せないという確信を持っているからです。

そう、このように書いてあります。

皆さんいかがですか・・・わたくしは確かにその通りだと思うんです。最初にガザと来民が重なるって申し上げました、共通点二つあるんです。ガザの今の問題は来民と本当に条件的に重なるところがあるんです。そもそもイスラエルというのは、第一次大戦前まではパレスチナ人の国だったんです。皆さんご存知ですか。それを第一次大戦の終結後、オスマン帝国といいましたが、そのオスマン帝国が破壊してしまいました。その時にイングランド、英国ですね、英国はイスラエル、つまり当時のパレスチナ人の土地であるイスラエルを英国が統治していいですよ、言っているのです。これ第一次大戦の話です。英国がそのように言いました。その時に、ユダヤ人の有識者たちはちょっとイングランドを茶化してみて、「じゃあ自分たちイスラエル人にも少しだけそこに入って行っているですか」とイギリス政府に言ったんですよ。そうしたらイギリス政府は、「ああ構いませんよ」といくつかの条件をつけたのですけれども、結局先のユダヤ人たちに同意したものですからどんどんヨーロッパ各地でずっと差別と迫害を受けてきていたユダヤ人たちがイスラエルに住むようになっていきました。考えてくださいみなさん、日本政府は何の必要もないのに大義名分をかざして中国に、そこに住んでいる人たちの国に勝手に武力で入って行って、しかも中国の東北部を勝手に満州国だなんて作り上げて、住んでいる人たちを迫害して土地を乗っ取ったじゃないですか。イスラエルは第一次大戦後、今日に至るまでそれをしてきているのです。だから人の国に行って、まるで泥棒のような行為であるにもかかわらず自分たちの国のように立ち振る舞

う、これってとんでもないことです。それは残念ながら日本が 80 数年前にやってきたことと全く同じことなんです。皆さんそのことをご認識されたことがありますか。わたくしは本当に一言、日本政府の重鎮が中国の人に対して特に満州の周辺の人たちに対しては「あまりにもひどいことをしてしまいました」と言ってもらいたいとつねに思います。1961 年日本キリスト教団は、プロテスタントは自分たちの戦争責任を反省すると同時に、他国の人々を苦しめたことに対する謝罪を表明しました。カトリックの方では、まだなかなかそこまで至っていないところがあると思うんです。今回大塚司教様も書いてくださった、75 周年ではバチカンの方で人間の尊厳ということをきちっと歌い上げてくれています。80 年まえのボロ負けしたあの戦争を改めて一人ひとりが顧みて、自分たちのせいじゃないと、国がやった、天皇がやった、関東軍が悪かった、それだけではなく、日本人一人ひとりのあの時に歯向かえなかった決断の甘さ、それは自分たちの各ファミリーがそうであったのだということを顧みていただいて、本当に戦争はもうしない。人を民族的に差別しない。そういうことを表明できる今年の 80 年というのはいい方向で迎えられているとわたくしは信じております。ここにいらっしゃる皆さんは現在のガザに対して思いを寄せていただいて、いろんなところでアピールしてくださっている、わたくしとても敬意を表します。本当にイスラエルは間違っている。ガザの人たちは人間じゃない、「動物」などと平気で言い切るような今のイスラエルです。ところが 80 年以上前の日本だって、そうじゃないですか。中国の人たちを人間扱いしなかった。先ほど司教様が言われました、山口県宇部の海底に沈んだままの長生炭鉱の人たちも、いくらでも助けようと思ったら助けることが出来たんですよ。山口県のあの海はですね、皆さんご存知ですよ、太平洋戦争中の人間魚雷「回天」の訓練がずっとあった。連綿と彼らは訓練計画を立てていました。訓練ですからいかにようでも、あの 1940 年代海底に閉じ込められてしまった炭鉱夫の人たちを助ける術はあった訳ですよ。それなのに司教様がおっしゃったように、わざわざ憲兵隊が死ねばいいと思って閉じたんですから。何という人間の尊厳というものを無視した姿勢だったか。そんな日本人の姿勢をいまとなっては世界中が知ってます。先日の搜索活動もそうですが、探しても探しきれませんでした。蓋をした入り口だけはようやく潜水夫が見つけてくれた。だが遺骨は探しきれませんでした。だから 4 月の 1 日に潜水夫の人たちや韓国からもたくさん見えて探そうと予定されています。そういった他国の人たちの命、人間の尊厳さえも踏みにじった、あの時代の日本があったということですね、やはりこの 80 年という一つの区切りの中で、あらためてお年を召された方も若い方も考えていただきたいと思います。わたくしはこのような状況をアメリカにバンバンバンと言うものですから、とてもアメリカの入管はわたくしを入れてくれません。だからやむなくもう少し、トランプ政権が倒れるまでは日本にいなければなりませんので、引き続き皆様方のご理解のほどよろしく願いいたします。

松浦司教：先ほどの山口のケースですが、あれを見てつくづく思うことは、韓国から遺族の方がたくさん来て、そして一生懸命に取り組んでいた日本の人たちと出会って心から感謝していました。彼らはお父さんの遺骨を故郷にもって帰る事だけを望んでいるというのです。これを見ると、遺骨収集作業が、実は真の和解につながっていくんだと実感します。だから**過去をしっかりと見るということは和解につながる**し、それが目的ですということを思いました。あともう一つですね、非常に大きな問題、苦しい問題が黒川の記述の中にありました。黒川開拓団にも現地の人たちの襲撃がありましたが、それほど大きくはなく、日本人は無事に帰ることが出来た訳ですが、それは、そばにソ連軍がいたことも一つの理由でした。しかし、もう一つの理由は、黒川の人たちがソ連兵の要求に従って性接待の目的で女性たちを差し出したということだった。しかもその後、戦後、日本でも政府がアメリカの進駐軍兵士の性接待のために女性を募集してきた訳です。こうした問題の背景には差別の問題がありますが、部落差別だけでなく色んな差別が複合的に絡まりながら、こういうことが起こっていく。いみじくも、エィミさんの言葉を先ほど私が紹介したように、**平和のうちに生きる私たちに**

は想像すらできない、あの時代の人々の極限まで追い詰められ、生死の境に立たされた時の決断を非難する資格など私たちにはない。だが、それでもなお言及しないではおれない事実があるということは重い言葉だと思います。難しいことですが、こうした問題を直視しながら悩みながらも問い続けなきゃいけないというふうに思っています。

エイミさん：来民の（著書）中にも黒川のことを入れました。先ほど申し上げたように、宮本貞喜さんは黒川開拓団で、生き延びて帰国までの1年間をそこで過ごされるんです。前半は本当にもう狂気の沙汰だったと（黒川団員が）いうくらいに厳しい状況の中で黒川の開拓団の人たちに励まされるのです。でも来民開拓団があのような悲惨な状況になったということを知るにつれですね、やはり自分たちも満州人ではなく、今度はもうソ連兵が入ってきていますから、8月9日以後ですね、その状況の中でいつ自分たちも襲われるかわからない。相手は満州人だけでなく、ソ連兵もいつ何をやってくるかわからない、という状況の中で黒川の開拓団の幹部たちはソ連兵に自分たちの開拓団を守ってもらおうと考えます。あの極限の中での決断というのは団員たちの「命」を守るという点において非常に素晴らしかったと思うんです。ただ、交換条件があった。そこが問題なんです。司教様が言われたように、女性たちをソ連兵に差し出したというところが、後々の世で問題になりました。しかしながら、その点については、女性の目線、ジェンダーの目線からだけで、つまり今の目線だけで語ってはいけないのではないかと思います。なぜかと言いますと、あれだけの極限地帯です。あの状況の中で、宮本貞喜はもう昼夜、喚き暴れまわる姿を団員たちは目の当たりにしている。ときにはつじつまのあわないようなことも言って、開拓団の人たちに我を忘れて殺めるような状況にもなりかねない時期がずっと続いたと云われています。そういう中で、自分たちも自決をしなければいけない。彼らはもうすでに青酸カリを貰っていました。敗戦後の彼らは、黒川の人たちは、青酸カリをほとんどの人に配られていたんです。でも死ぬに死にきれなかった。それならばここは我慢して出来る限り努力して日本に帰るまで辛抱しよう、という状況になったといえます。そこで浮上してきたのが幾人かの若い女性たちをわたくしは「性接待」とは言っていないんですよ。著書の中では「性奴隷」と書いたのです、それはまさしくその通りです。ようやく1年後、ほとんど全員が日本に帰って来れるんです。わたくし、その時の女性たち、何人もおばあちゃまたちにインタビューをしました。不思議なことに恨んでいる人ってあんまりいないんですよ。お国のためにやったのだから、と。どういう訳か黒川には軍国少女が圧倒的に多かったんです。これは意外な事実でした。兵隊さんが戦地に行って、自分たち家族を守ってくれているんだから、男性にしか出来ないことがある代わりに、自分たちも女性にしか出来ないことがあるんだと言われて、その申し出に自分たちは甘じたと、これは数名のおばあちゃまが言われています。

それをきいて本当に絶句したんですけれども、もっと若い子がいますよね、13歳、14歳。その子たちは本当にまだ少女です。その子たちはやはり泣き叫んだ、と言いましたね。彼女たちはソ連兵との作業が終わった後、作業ですこれは。作業が終わった後、体を洗う役目がありました。単なるホースを使って洗浄するのです。そのことを知って以来、街でホースを見かけるといつもそのシーンを思い起こすんです。けれども、ホースから伝う水に消毒液が入っていました。それをソ連側が提供していた。これも不思議ですよ。そういうところもあるんですよ。ですからいろんな意味合いの中で、彼女らは女性にしか出来ない国への奉仕というものでもって、自分たちはやってきたというのがインタビューしたおばあちゃまたちの圧倒的かつ気強い意見でした。洗浄係の少女たちはそういう訳にはいなくなかって逃げまどったということも聞きました。ただし、ここで問題になるのは幹部の娘たちは誰も差し出されていないという事実です。無名の開拓団員の中から差し出されていたという事は開拓団の中にもヒエラルキーがあった。つまり階級があったという事実です。もう一つ申し上げたいのは、彼らは無事に9月になり日本への帰国の準備に入ってようやく帰ってくることが出来ました。当然ながらそれは黒川開拓団の故郷、黒川村ってかなり大きな村で今でもあります。

風光明媚なステキな村なんです。その村に帰りました。帰った後で同じ引き揚げてきた幹部たちは、村人たちに非情にも話すんですね、みんな年頃の女性ですから「あの子たちに絶対手を出してはいけない。彼女たちは傷物なんだ」という風に。わたくしはここに対しては非常に憤りを感じております。何があってもそれだけは口にしてはならない。満州でのことは満州でのことです、帰って来てそれを言うのはいけません。非情にも開拓団で犠牲になった女性たちは二重の差別を受けたということになります。ただしこの点も、先に申し上げましたが現在の目線だけで、公表したり評論するというのはかなりリスクがとわたくしは思うのですが司教様いかがですか。

松浦司教：我々は、すぐこれはダメこれは良いと白黒に分けたがる傾向にあるのですが、過去のこういう事実にはいろいろな要素がからみあっています。ですから、その背景や当時の価値観や風習などを丁寧に見ながら検証する必要があります。そして、その当時の人たちの問題として片づけるのではなく、それを受け止める今の私にはどういう生き方が問われているのかという責任がむしろ私たちにあるということを感じますね。

エイミさん：先ほど奥村神父さんがマスコミがあかんと言われましたが、本当にわたくしもそう思うんですね。わたくしは若い時からジャーナリストになるための教育を受けてきたのです。開口一番にボースサイドに見ないといけない、そしてそこに照査、何があってもフィールドワークをなささい、いくつになってもベテランになってもそれだけは忘れてはならない、そうじゃないとジャーナリストではない、と駆け出しの時からずっと叩き込まれてきました。

話はそれですが、カトリック教会にも小さい時はいやいや通う訳ですよ。無理やりですね。やはり親に歯向かえませんか仕方なく通う訳です。そしたらその後に日曜学校があるんです。みんな学校で何を感じた、いじめられた、差別を受けた、あるいはいいことがあったということを口々に日曜学校で言われたんです。

そうするとみんなつらかったことばかり言うんですね。あるいは良かったことばかり言います。そうすると神父様はですね、それではあかんぞと。両方を見ないとダメ。あかん（ダメ）と思ったことでも反対側のことを見て沙汰しないと、大きく大人のような目線に成長出来ないよということを神父様が口うるさく言うてくれたんですよ。わたくし、日本のカトリック教会は存じ上げません。日曜学校もどうあったかは存じ上げませんが、アメリカでは、わたくしの育ったシアトルの街は圧倒的に仏教寺院が多いんです。その日曜学校の指導者たちはみんなよくなかった。なぜろくでもなかったかと言いますと、日本化をおおいに奨励するんです。もう日本、日本、日本イコール天皇、天皇、天皇なんですよ。戦前の親たちの世代もそうであったように、わたくしたちの戦後でもそうでした。さすがにカトリック教会はアメリカ人の神父様ですから、それは言われなかった。

あくまで片方を見て沙汰してはいけない、もう片方を見て沙汰しなさいと。それが意味カトリック者としても成熟していく最初の道筋だよということを、言ってくださったんです。これは、よかった。今日本のマスコミ、どれもこれもみんな片方（一方的）じゃないですか。例えば石破政権に対してだって、悪いことばかり言っている。あの人がやってきたこと、正しいことなんてほとんど今現在でも言われていません。わたくし、前回奥村神父様とここで話して、少しだけ石破のことを言いました。そしたら初めてエイミは石破に騙されているというコメントが届いてちょっとびっくりしたんですね。わたくしは石破と二人でお話をしたときに、彼は嘘など一つも言っていません。事実をすべて言いました。そして、わたくしは彼とお話をしたときに、これはカトリック新聞の人には立ち会ってもらったんです。

わたくしは開拓団についてお話をしました。それについて、いかように考えていらっしゃるかと、戦後 80 年に向かってわたくしは彼に言いました。彼はですね「開拓団の人ほ

どお気の毒な人たちはいない。あれほど悲惨な目にあった人はいない」と。なぜならば、よろしいでしょうか、石破はこう言いました。「あれは国の責任だ。国が開拓者たちを捨てました」と本当に彼は言ったんです。

そういう側面はところどころ、いいことも悪いことも載せますけれども、都合の悪いことというのは、どのような雑誌社も新聞社も、わたくしへのオファーは来ますけど石破に対してけなすと喜ぶ。本当のことを書くに没にする。それが今現在もってのマスコミであるということは、事実なんです。そこは皆さんもお考えいただいて、本当かなとそういうことも、SNSを信じるばかりでも難しいと思います。

やはり新聞もテレビのニュースもコメンテーターも非常に偏っているということを改めて、奥村神父様はその点をおっしゃりたいということですね。

奥村神父：テレビによく出てこられるコメンテーターの方は、大体同じことを繰り返しずつと言い続けるんですけども、本当は新たな情報が入ってくることによって、だんだん変化していくのが自然なことであって、こういう新しい情報が入ったので、前にある情報というのはこういうふうにコメントは変えていったと言ってくるよ、そういう自然な流れがあつてしかるべきなんですけれども、最初から決まったコメントがあつて、それをひたすら言い続ける。それが、今の現状かなというふうに思います。

だいぶんお話、熱の入ったお話をいただきました。皆様からもいくつかですね、コメントなりご質問なりいただけましたらと思います。



【質問Ⅰ】一つだけ質問的なことになるんですけども、先ほどこの黒川の開拓村の衝撃事件で、女性の方は国のために出来ることは何かということで、性を提供したようなことを話されていたんですけど、明治時代に生まれた山田わかさんが、何か手記に書いておられたのを誰かが話しておられたのですが、山田わかさんは日本でいわゆる赤線、青線を廃止

することをお話しされていたんです。あの方は実際には他の国に行つて、自分の性を売っていたと。それが国策であつたということを述べているという記事があつたんです。だからこれも含めて、結局日本の国はそういったこともしていたんじゃないかと思われるんですけど、だからこれだけに限らないことではないかと思います。以上です。

松浦司教：いわゆる「からゆきさん」という事実もあり、その背景にある構造は形を変えて今も綿々と続いていると思います。この問題は、当時、主に九州の方が多かったようですが、強制的に連れていかれたという事だけでなく、間に業者が入ったりしていました。それも、強制的に連れていかれるだけでなく、女性本人が、家が苦しいので、家族のために私が行きますって行った人もいます。いろいろなケースがあるとしても、いつもそうやって女性たちが犠牲を払われていく、実質売られていくという構造はやっぱり面々と続いている。今とつながっていると思います。

奥村神父：関連してなんですが日本が明治維新に入っていく過程ですでに江戸時代にあつた公娼制度をさらに明治にはいつて強化していったんです。要するに軍隊に性病を蔓延させないために、公娼制度をうまく利用して、そういう売春宿を海外に行くときも、ちゃんと用意して行けるように、有名な森鷗外は陸軍軍医でしたけれども、森鷗外なんかは割と中心にそ

ういった制度を作り上げていったんです。だから国策の中にそういったものがずっと明治維新以降あった。軍隊を整えて海外に派遣していくときに、一緒に移っていったのだというふうに、私が言っているんじゃないんですけど、私が読んだのは林葉子さんという人、大学の先生で、『性を管理する帝国』というものすごいタイトルの本があるんですけど、そこに結構まとめられていました。

松浦司教：もう一つ、明治になって日本は西洋に追いつけ追い越せで必死でしたが、この「からゆきさん」の事実や公娼制度などはやっぱり批判される訳です。それでなのか「からゆきさん」の事実は封じられたんです。なので、「からゆきさん」の事実はほとんど知らされずに葬られていったという事実があります。

エイミさん：それに関連してなんですが、わたくしは来民を調べるにあたりまして、来民遺族の人たちが、やはりずっと来民にお住まいにならないで、全国に散らばっていかれた方たちを訪ねました。そうしますと、やはりその周辺には被差別部落があるんです。被差別エリアが。そこからもういぶん「からゆきさん」が行かされているんですね。ですから「からゆきさん」を送り出す背景にも、やはりそういった差別構造、あるいは差別の政策があったということです。そここのところも見落としてはいけないとわたくしは思います。そして最後にですね、アメリカに日本は負けました。わたくしはご存知のように二つの国を抱えながらここまで来ていまして、両方に対して憤慨してやまないのは今も変わらない気持ちなんです。その中で、戦後ですね、進駐軍が来るにあたって先ほど司教様が言われました、その公娼制度というよりも、やはり売春宿などを設ける訳ですね。その時に、日本政府は、**新日本女性求む**、米兵相手の日本女性のことを新婦人というふうに言ったんです。新婦人、新女性、というグループがあるようですが、そういうような新しい女性、新しい女性よ来たれと言って、日本津々浦々に公募しました。そして東京にやってきたときに、実はそれは米兵相手の職業であったと裏切られる訳だけど、もう支度金も汽車賃も貰っているのですから、当然ながらどうしても後ずさりすることは出来ないじゃないですか。そこでわたくし一番申し上げたいのは、日本政府というよりも日本の警察隊が彼女らを募集したということなんです。これは大きな問題だと思っています。ではそういう動きになったということ、進駐軍が来ますからいろんな記者たちもついてきます。その記者たちはアメリカにそれに関連する記事をどんどん送る訳です。アメリカの女性たちは怒り狂いました。とんでもないと、日本の復興のために行っているのに女遊びをするとは何事だと。そしてそれを奨励しているアメリカ軍、そして日本政府はそこまで落ちぶれているのかと言って、その最後の言葉を言っていたのがわたくしは非常に嬉しかったんですね。「そんなような状況に自分たちの夫や息子や父を送らせているのか断じて許せん」と言ってですね、アメリカ全国の日本に駐留させている家族たちはアメリカ軍に厳しく糾弾して運動を起こしました。それによってその制度はたちまち立ち消えになったんです。ところがもう国（ふるさと）に帰れない女性たちがいるじゃないですか。結局その人たちはやむなく、つまるところ戦後の言葉で「パンパン」といわれる人ですね。彼女たちはやむなく日本各地、兵隊のいるところ（街角）に立って、彼らを相手に毎日の飢えをしのいでいた、そういった事実もございます。よろしいでしょうか。

【質問Ⅱ】 エイミさんにお聞きしたいんですけども、なぜ来民の問題に関わったのか、ここにおじいさんのところへ送ってきた来民の本もあったということが終わりのところへ書いてあるんですね。なぜアメリカにおられる方が九州の熊本の来民のことを知っているのか。私も20年ほど前に、同和教育という会合の発表会で初めてこの熊本の報告を聞いてびっくりしてという形になるんですけども、どうしてこういう関心を持たれてきっちりこういう調査をされたのかなと、そこがちょっと知りたいです。

エイミさん：ありがとうございます。いつも講演の終わりに皆さん聞かれることなんです。お読みいただいたということなので、わたくしが語るとあまりにも時間がかかりますので、この後書きの中にその時の心境を捉えたものを書かせていただいたので、いつも彼がそれを朗読してくださっているの、ちょっと読んでいただきます。もう一人の質問を先に、はいどうぞ。

【質問Ⅲ】 私は今 88 歳で中国から引き揚げて今年で 80 年になります。京都遼寧開拓団で満州に行きました。父は中国へ行ったら兵隊に行かんでもいいっていうことだったので行っただけなんですけど、すぐに関東軍に召集されました。今日ここにこうしてお話しさせてもらっているのはキリスト教のおかげです。私は死んだ母親の両足を持って捨ててから、すぐに路上生活に入っただけです。その時に助けていただいたお方が、キリスト教のお方であって、そのお方に助けていただいて、東舞鶴港に帰ってきました。その時の友達が 2 人、お姉さんがこの教会でお世話になりました。大きなジープで京都駅まで迎えに来られて、京都駅で私は野宿して、それから長崎に行きました。このおかげは、なぜかと言われて、最初に松浦（司教）さんもおっしゃっていた、歴史を伝えるそのことは、当時の私は母親のご飯を作るため、コーリャンご飯を鉄かぶとで炊いていたんですけど、一番安全なところは後ろには死体が 200 人ぐらいある、その 1 メーター前で、そこで炊いていたんです。今から思ったら、その人たちが私を日本に帰らせてくれた、そしてまたこうしてキリスト教の方に助けていただいた。これが私の運命だと思うので、今、小学生、中学生、大学生にそのお話をしているんですけど、今の幸せに気が付いてくれたらと思い、私はもっともっと平和ということ伝えていきたいと思います。

今年の 8 月の 10 日には、この教会でまたお話をさせていただきますけど、子どもたちが平和ということをもっとすぐ望んでいます。「今はお父さんがいるのは当たり前、おなか一杯食べられるのは当たり前、そのことに気が付かなかった。黒田さんが戦争が終わっても 80 年間その思い出がまだあるという、その辛さを僕たちはわかりました」。子どもたちは平和という事そして家族とか命を大切にすること、を噛み締めて喜んでくれています。もう感想を読ませてもらったら涙が出るくらい、勇気をもらって、また今日はこうして現地の話を聞かせてもらった。私は子どもですので、戦争とかそういうようなことを知らなかった。それでもロシアの兵隊さんは機関銃を持って、ロシア語で機関銃を向けて「ダヴァイ」、そういうような声をかけられたから、その意味も何もわからんまま死んだふりをして、路上生活でもう捕まったら売られるか殺されるかのところから、こうして助けていただいて、今日こうして皆さんの前で話ができるような幸せをちょっとお伝えしました。そんなことで 8 月よろしくお祈りします。

松浦司教：ありがとうございます。今こういう開拓団の話をしていて、本当にまさに満州から引き揚げて来られて、そういう生きた体験をちょっと聞かせていただいてありがとうございます。

エイミさん：今、おじいちゃまがソ連兵から銃口を向けられたとおっしゃられたので、ついでながら付け加えたいと思うんですが、黒川開拓団ではですね、やはりソ連兵に差し出したのですけれども、（ソ連兵に守備を頼んで以後）たった一人もの犠牲者を出さないで、その後帰国しているんです。こここのところは、なかなかソ連兵にもええところがあるなど。幹部がそうなんでしょうね。ちゃんと仁義 — 引揚者はロスケと蔑視するが — を守り通して約束したことは守りますと言って、一人の犠牲者も出さずに、満州人の襲撃というのはたびたびあったんです。小ぶりの襲撃はですね。それを全部ロシア兵が守りました。これも事実なんです。きちっと帰したロシア軍もあったということなんです。ですからロシア軍も、幹部はしっかりしているんです。兵隊は日本もそうですね。そういったこの規律がどうしても戦争

の苛立ち、苦しみ、恐怖からそういう状況になれるんだということも分析されている方もいますが、ソ連兵にしては珍しく黒川は徹底的に守ってくれたというところは、どこかで救われる思いもしております。これは両面から考えての一つのポイントであるということです。ご理解ください。最後に先ほど質問された方ですね。この方がなぜわたくしがということなので、きっと皆さん方もその点については疑問に思ってみえるかと思いますので、じゃあ彼に読んでいただいて最後それをお願いいたします。

：：： 朗読 ：：：

著書の中から終わりに書いているというところに記されていることを要約して話すのと、原文をそのまま読むのと、両方で紹介させていただきたいと思います。エイミさんの大叔父さん、おじいさんの弟にあたる方の話です。

大叔父さんは広島親戚宅に逗留中、アメリカ国籍を捨てました。それが長年の夢であった。日米開戦に向けて暗雲漂う時代。兵学校を受験して合格。やがてアメリカとの戦争が始まり、「鬼畜米英」と喧伝して英語を排した時代。江田島の海軍兵学校だけは英語学習が続いていたが、その兵学校でさえ、日系人に対して英語の発音がうまいと言っては、先輩や同期生は辛くあたった。だからであろうか、大叔父は自らを国家主義者、いや天皇主義者に鍛えようと懸命になった。8月6日、原爆投下による大惨状、それを目の当たりにした大叔父。廃墟と化した広島街、すさまじい破壊力の下で放射線を浴び、立ち尽くす生存者と黒焦げになって横たわる死者の姿。我が母国アメリカは、ファシズムから世界を守るため、民主主義を背に立ち上がった、などとうそぶき、人としての良心を完全に見失ってしまっていた。

自らの目で惨状を確かめた大叔父は、以後酒びたりの日々となっていく。日夜叩き込んだ天皇制国家主義を信じた弟を案ずるあまり、祖父は、つまりエイミさんのおじいさんが、原爆で廃墟となった両親の故郷、広島を訪れ、弟に寄り添った。だが、もはや遅すぎた。

日本人としての生き方を説いた教官たちの権威は崩壊、大叔父の精神はズタズタにされた。それは家族の絆さえ断ち切ったのである。そうして最後は自ら生涯を終えた。弟の最後を見届け、シアトルに戻った祖父は書齋にこもり、ひたすら書物を耽読していた。その祖父も真珠湾攻撃が始まる前にFBIに連行され、ただちに日系人強制収容所へと送られた過去があった。実弟が日本海軍の士官であったことがその背景の一つにあったのだ。沈みがちな祖父が気がかりで、わたくしはこっそり書齋に入り散らばる「雑誌」を拾い上げて眺めていた。その一つが、『ONDORI』という名の雑誌であった。そこに来民開拓団、そして宮本貞喜さんのことを記した文章が載っていた。その時に宮本貞喜さんと来民開拓団のあの悲劇に出会ったということなんですね。

エイミさん：そういうことです。よろしいでしょうか。ありがとうございました。その頃は、まだ日本語も読めませんでしたが、祖父は簡単にそれを教えてくれたということなんです。この『ONDORI』というのは、戦後の日本を励ますかのようにとてもきれいな表紙だったんです。ピンクであったり、草色であったり、空色で、わたくしはその表紙を見るのが楽しみでした。ところが来民のことを書いているときは、本当に灰色の表紙だったんです。なぜこれは灰色なんだということを祖父に聞きましたら、祖父がさりげなくそういうことを教えてくれたのが、幼心のわたくしに非常に印象に残ったということなんです。それはあまりにも、祖父が自分の弟の、最後に衝撃を受けて、苦しみながらの最後の日々を続けていたというところで、わたくし自身も後に、その来民開拓団の悲劇というのはどういうものである

のか、改めて検証してみたいと、ある程度長じた後にそういうことになったのが、そもそものきっかけであるということをお伝えした次第です。

今日、松浦司教様とご一緒にお話し出来ました。奥村神父様、本当にありがとうございました。そして大塚司教様も、本当に思いがけず最後まで聞いていただいて、お三方に心よりお礼申し上げます。わたくしは、毎日アメリカの悲劇、イスラエルに対するアメリカの姿勢、トランプもそうですが、トランプを取り巻くキャビネットの人たちに対して、怒り、苛立ちを超えて気持ちが落ち込む日々を過ごしておりますが、その中で息子が言ってくれたんですね、母さん、そんなにブーブーブーブー言わないで、たまには聖書を見たらどうだと。実は何年間も見たことないんです。ただいくつかは頭の中に入っているんですね。日曜学校で教わったことなどで、パラッと開きまして、そうさそうさ、子どもの時によく読んだロマ書、ロマ書 6-23、つまり、**罪の結果は死である**という、その文言がわたくしをどういう訳か励ましてくれています。ですから、もう今、わたくしの国アメリカは大罪を世界に向けて犯しています。そういう状況の中で、少しでも何とか、ガザの人たちですね、80年前、来民の悲劇は276名でした。もちろん、もう何万人もの膨大な開拓避難の人たちの死者が出ております。ただし、来民の「悲劇」から80年後の今、ガザの人たちは自分たちの国を奪われ、銃弾にまみれ、すでに30万人以上の人々が亡くなっている現実。

その半数以上が子どもたちであるところを、いつも心しながら出来ることは何だろうかと思ひながら、悶々と日々を過ごす中で呪文のようにこのところ、ロマ書を口ずさみながら、何とかアメリカをやっつけてやりたいと、目を覚ましてもらいたいという思いで、アメリカのカトリック教会を中心に、厳しい言葉を投げつけておりますので、どうか、司教様方や神父様にも、そういったイスラエルの姿勢、そしてそれを援護し続けている愚かなアメリカに対してのアピールもいただけたら、わたくしは嬉しく思います。本日はありがとうございました。

【質問Ⅳ】 じゃあ、最後。ごめんなさい。あのね、この開拓に行かれた、部落差別から逃れたい、そういうことから開拓に行かれたんですけども、そこの方たち、行かれた人もですけども、残っている人に対する施策はどういうことになっているのかなと思って、今まで部落差別はずっと続いていますね。明治4年に解放令が出て、まだいまだにやっぱりいろんなところで部落差別があります。だからこの人たちが部落差別から逃れたいという気持ちで開拓に行かれたんですけども、その後の地域に対する施策はどうなったのかなと思うんです。

エイミさん：わかりました。それは政府の姿勢を今質問された訳ですね。まず開拓団の人たち、残っている人は全員亡くなりました。生き残っているのは兵隊に取られた約10名の男性方なんです。戦後になってその人たちは帰還してこられました。シベリアに送られて5年後に戻ってきた人もいます。1年後の人もいます。3週間で戻ってきた方も。それぞれの方がいらっしゃるんですが、彼らは国としてあるいは兵士で行きましたから、その恩給というのは貰われている人は貰われています。ただ遺族に対して全員自決をしたからといって、その人たちに対しての政府の補償というのは全くございません。これは開拓団で帰ってみえた方も同じだと思っております。よろしいでしょうか。それと、差別ということについてはですね、いつも思うんです、差別する側が悪いんです。ですから差別される、あるいは差別に負けないという言葉がよく云われますが、この点わたくしは一貫して申し上げているんです。わたくしもアメリカで日系人ですから、ジャップジャップと言われて、差別されてきた側の人間です。でもそこで、アメリカでは、差別に負けないという言葉を使わないんです。差別を乗り越える、乗り越えるだけの強靱な姿勢を鍛えようじゃないかと、いうことで子どもの頃からしつけられてきております。ですから、その時から、差別する側が悪いという姿勢で来

ておりますので、この来民以前から 部落問題、あるいは民族学的にわたくしが講演をする時にいつもそのことを言ってきております。

【質問者】：私も当事者です。ありがとうございます。頑張らないといけないなと思っています。

エイミさん：お優しいことばをいただきありがとうございます。最後に先ほどお尋ねいただいた辻本さんという方なんです。日本で初めて辻本さんという人と直接お会いしました。実は初めて会ったのも珍しいですね。ただ唯一、京都市内を回っているゴミのトラックにツジモトというのがあり、しかも英語で書いてありしばしば目にして勝手に身近に感じておりました。そうしたら、きっとわたくしの祖先は被差別の人であったのではないのでしょうかというふうに言われましたので、そこのところを、今日の機会に自分自身の遠い先祖のことをもう一度リサーチして今後も頑張りたいと思います。ありがとうございました。

最後に、本日朗読をしてくれた友人は林と言います。そして上映のテクニシャンは大倉と言います。ちょっと二人立ってください。彼らはこの来民の歌ですね、第5番まで歌ってくれた張本人なんです、上手でしょ。

去年は来民が仏教でいうところの80周年だったものですから、皆さんの前で、そして慰霊碑の前でも、二人はしっかりと歌い上げてくれました。この詩はですね、宮本貞喜が1年後、9月に戻ってきて、初めてそこで開拓団の悲劇を伝えた村のボロボロの公民館があったんです。そこで初めて、その状況を聞いて衝撃をうけた遺族の一人――豊田実さん――がその夜に5番目まで作られた歌なんです。それを作曲していただいて、今に歌い継がれて、このお二人が上手に歌ってくださっているということで、改めて彼らにも感謝をしたいと思います。本当に今日はありがとうございました。

奥村神父：当初予想していたよりも豊かな内容だったと思います。それぞれに今日のお話を持ち帰られて、皆さんご自身でどんどん豊かにしていただけたらなと思います。今も戦争が続いていますが、その中で虐げられている人たちがどうか解放されますように、そして私たちが犯してきた様々な過ちがどうか乗り越えられて、そして平和が実現しますように、祈りたいと思います。**神様、どうか私たち愚かな者を助けてください。あなたが備えられた平和の種が、どうかこの世界を平和へと導いてくださいますように。どうも長い時間ありがとうございます。**

— 終了 —